令和４年度

小　論　文

（60分）

栄 養 科 学 部　　栄 養 科 学 科

解答はすべて解答用紙に記入すること

注意事項

１．試験開始の合図があるまで、この問題用紙を開かないこと。

２．問題用紙は、表紙を含めて３ページである。

３．解答用紙は、２枚である。２枚とも解答すること。

４．受験番号・氏名は、監督者の指示に従って記入すること。

５．問題用紙の余白等は適宜使用してよい。

問　題（その１）

栄養科学部　栄養科学科

厚生労働省による日本人を対象とした国民健康・栄養調査の結果です。**表１－１**は、年齢階級別にみた歯の本数の区分（20本未満の者と20本以上有する者）です。また、**図１－１**は、年齢階級別にみた咀しゃくの状況（何でもかんで食べることができる者の割合）、**図１－２**は、咀しゃくの状況別にみた低栄養傾向の者の割合を示したものです。「低栄養傾向」とは、身体を動かすために必要なエネルギーや、筋肉や内臓など身体組織を構成するたんぱく質、身体機能を維持するためのビタミンやミネラルなど栄養素が不足し、栄養状態が低下している状態のことをさします。それぞれの図表をよく読んで、以下の設問に答えなさい。

表１－１　年齢階級別にみた歯の本数の区分

	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～69歳	70～79歳	80歳以上
	人数（%）	人数（%）	人数（%）	人数（%）	人数（%）	人数（%）	人数（%）
20本未満	0　－	6　(0.8)	43　(3.9)	98（10.0）	388（A）	629（49.4）	453（70.7）
20本以上	496（100）	719（99.2）	1,073（96.1）	884（90.0）	936（B）	645（50.6）	188（29.3）

図１－１　年齢階級別にみた咀しゃくの状況

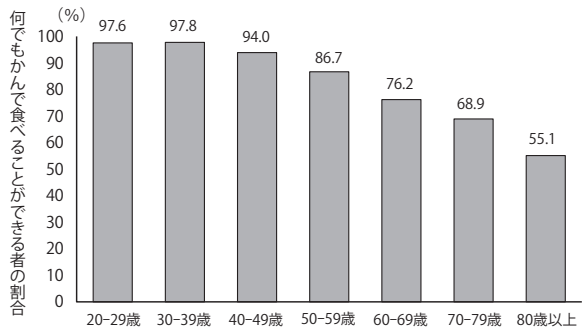
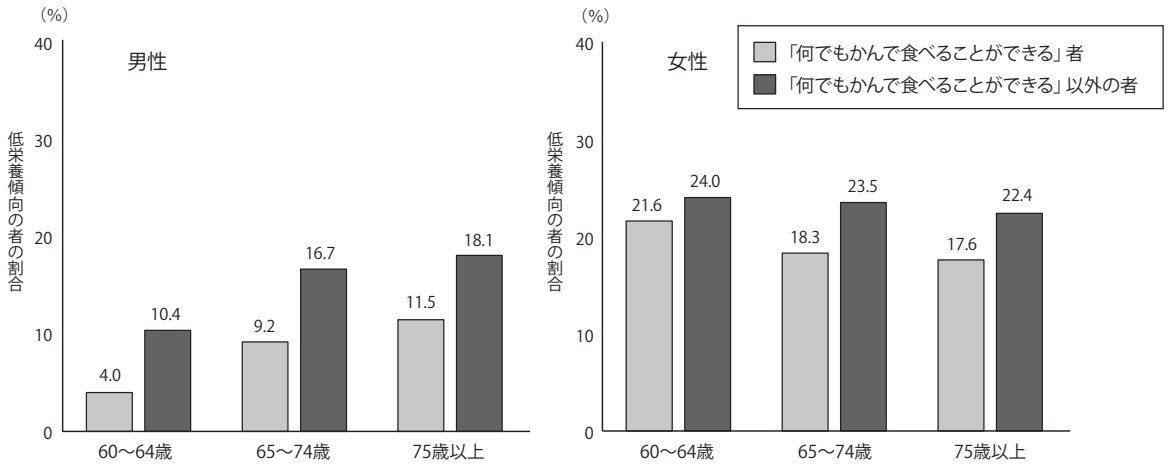


図１－２　咀しゃくの状況別にみた低栄養傾向の者の割合



注１）「何でもかんで食べることができる」以外の者は、かんで食べる時の状態について、「一部かめない食べ物がある」、「かめない食べ物が多い」又は「かんで食べることはできない」と回答した者。
（資料：図表はすべて厚生労働省「平成29年国民健康・栄養調査報告」より作成）

設問１．**表１－１**において、60～69歳における、歯の本数が20本未満の者の割合（A）（%）と20本以上の者の割合（B）（%）を求めなさい（答えは、小数第２位を四捨五入し、小数第１位までとすること）。

設問２．**表１－１**および**図１－１**をそれぞれ比較し、年齢階級別にみた特徴を70字以内で記述しなさい。句読点、括弧、数字、英字は１文字とし、一マス使用すること。

設問３．**図１－２**の結果から、高齢者の低栄養を予防するためには、どのような事が重要と思われるか記述しなさい。また、設問２の解答をふまえて、考えられる具体的な対策方法について記述しなさい。句読点、括弧、数字、英字は１文字とし、一マス使用し、130字以内で書きなさい。

問　題（その２）

栄養科学部　栄養科学科

表２－１は、わが国の二人以上の世帯の家計における食料への品目別支出金額と食料費全体に占める比率について、2000年から2019年までの４年または５年毎の推移を示したものです。「外食」とは、食堂やレストラン等へ出かけて食事をすることをいいます。「内食」とは、外食の対語で、家で素材から調理したものを食べることをいいます。**表２－２**は、同期間のわが国の世帯構造の推移を示したものです。以下の設問に答えなさい。なお、**表２－１**の各品目の物価変動は無視するものとします。

表２－１　二人以上の世帯の１世帯あたりの家計における食料への品目別支出金額（１ヶ月平均金額）と食料費に対する比率

	2000年		2004年		2009年		2014年		2019年	
品目	円	（%）	円	（%）	円	（%）	円	（%）	円	（%）
食料	65,653		61,622		60,414		61,869		66,525	
穀類	7,280	(11.1)	6,927	(11.2)	6,631	(11.0)	6,150	(9.9)	6,345	(9.5)
魚介類	8,659	(13.2)	7,385	(12.0)	6,678	(11.1)	6,250	(10.1)	5,884	(8.8)
肉類	6,525	(9.9)	5,967	(9.7)	6,343	(10.5)	6,921	(11.2)	7,272	(10.9)
乳卵類	3,753	(5.7)	3,399	(5.5)	3,268	(5.4)	3,516	(5.7)	3,811	(5.7)
野菜・海藻	9,013	(13.7)	8,642	(14.0)	8,145	(13.5)	8,372	(13.5)	8,491	(12.8)
果物	3,067	(4.7)	2,786	(4.5)	2,564	(4.2)	2,639	(4.3)	2,869	(4.3)
油脂・調味料	3,213	(4.9)	3,104	(5.0)	3,270	(5.4)	3,309	(5.3)	3,554	(5.3)
菓子類	4,885	(7.4)	4,769	(7.7)	5,128	(8.5)	5,157	(8.3)	6,027	(9.1)
調理食品	8,000	(12.2)	8,013	(13.0)	7,907	（B）	8,674	(14.0)	10,397	(15.6)
外食	11,258	(17.1)	10,630	(17.3)	10,480	(17.3)	10,881	(17.6)	11,875	(17.9)
内食	41,510	(63.2)	38,210	(62.0)	A	（C）	37,157	(60.1)	38,226	(57.5)

注１）ここでの「食料」費は、飲料、酒類、学校給食は除いたものである。
注２）「調理食品」とは、惣菜や弁当などの家庭外で調理・加工された食品である。
注３）「内食」とは、家で素材から調理したものを食べることをいい、ここでは「穀類」「魚介類」「肉類」「乳卵類」「野菜・海藻」「果物」および「油脂・調味料」の合計をさす。
注４）比率（%）は小数第２位を四捨五入しているため、合計しても必ずしも100とはならない。
（資料：総務省統計局「家計調査（家計収支編）時系列データ（二人以上の世帯）」より一部改変して転載）

表２－２　世帯構造の世帯総数に対する比率の推移

	2000年（%）	2004年（%）	2009年（%）	2014年（%）	2019年（%）
単身世帯	24.1	23.4	24.9	27.1	28.8
共働き世帯	20.7	20.7	20.7	21.5	24.0
高齢者２人暮らし世帯	9.3	11.3	12.5	14.4	16.0

注１）「共働き世帯」は、夫婦ともに非農林業雇用者の世帯。
注２）「高齢者２人暮らし世帯」は、夫婦のどちらかが65歳以上である２人暮らしの世帯。
（資料：「世帯総数」「単身世帯」「高齢者２人暮らし世帯」の数は厚生労働省「2000年・2004年・2009年・2014年・2019年 国民生活基礎調査の概況」より、「共働き世帯」は独立行政法人労働政策研究・研修機構「専業主婦世帯と共働き世帯」より作成）

設問１．**表２－１**において、金額（A）（円）と比率（B）（%）、（C）（%）を求めなさい（Aの答えは整数とし、BとCの答えは小数第２位を四捨五入し、小数第１位までとすること）。

設問２．**表２－１**の「内食」への支出内訳のうち、たんぱく質の主な摂取源となる品目３つについて、それらの食料費に対する比率に着目して、2000年を基準とした2019年までの動向について50字以内で記述しなさい。句読点、括弧、数字、英字は１文字とし、一マス使用すること。

設問３．**表２－１**では、「中食」の支出推移も示されています。「中食」とは、外食と内食の中間にあり、惣菜や弁当など家庭外で調理・加工された食品、あるいはそれを買って帰り家で食べることをさします。**表２－１**の食料費に対する比率に着目して、2000年を基準とした2019年までの内食、中食、外食への各々の支出の動向について70字以内で記述しなさい。また、そのような動向となってきた背景について、**表２－２**の世帯構造の推移から考えられる理由を140字以内で記述しなさい。句読点、括弧、数字、英字は１文字とし、一マス使用すること。